

福井県医師会

だまり

第666号 平成28年(2016)12月



表紙写真説明：冬化粧半ばの雷鳥（信州・乗鞍岳）

福井市 吉村 信

10月中旬、乗鞍岳の紅葉を見物に出掛けた。早朝は小雨が降ったが、<sup>なだみ</sup>豊平付近ではカラリと快晴となり、七竈の燃えるような紅葉を楽しむことが出来た。岐阜県側から上高地に向かいかけると、霧が流れ日も遮られ灰色の世界となった。ベテラン運転手から「右手を見るように！」との指示を受け目を凝らすと、霧の中に二羽の<sup>つがい</sup>雷鳥が忽然と現れ、急崖に沿って散歩を始めた。霧で猛禽の攻撃の無いのを確かめると、這松の間から、人も恐れず出て来るとのことである。七月には日本羚羊、今回は雷鳥と、2回連続して乗鞍の主を眼前に目撃出来たのは幸運であった。



日本羚羊

霧湧けば <sup>ライノトリ</sup>雷鶏崖に すっと佇つ

冬化粧半ばの雷鳥（信州・乗鞍岳）

福井市 吉村 信

## 醫 縫 録

# 副鼻腔炎の変遷

福井県医師会 監事 池田 拓生



耳鼻咽喉科の研修医として初めての手術が慢性副鼻腔炎に対してのCaldwell-Luc法で、犬歯窩を切開し上顎洞より病的粘膜を完全に除去する方法であった。ライトと額帯鏡を使い、術野は術者だけのもので、何をしているのか覗こうとすると、術者に光が入らず、邪魔だと怒られた覚えがある。助手が見れるのは術前と術後の状態で、術者の手の動きと器具で術中何をしているのかイメージしていた。その後内視鏡的副鼻腔手術が導入され、助手も術野を術者と共有できるようになった。手術方法も大きく変わり、飛躍的に治癒率は向上し、患者負担も軽減した。

私も一般病院の医長としてある程度自信を持ち始めたころ、篩骨洞にポリープが多発し、摘出後再発率の高い症例を何例か経験した。「あなたのようなタイプは術後再発する可能性が高い、再発するか？しないか？そんなことは、やってみなければわからない！人生いろいろ。」当時の人気首相のものまねで、自分の腕のなさを誤魔化した覚えがある。ひどい話である。今思えばこの再発症例が好酸球性副鼻腔炎であったのであろう。成人発症で、嗅覚障害を伴い、篩骨洞優位で、両側に鼻茸が有る。治療に抵抗性を示し、ステロイド内服のみが有効な治療手段であるが完治することはない。古典的な副鼻腔炎が減少するとともに出現してきた好酸球性副鼻腔炎。まるで劣勢に立たされた副鼻腔炎側が“それならば”と次のカードを切って、我々に挑戦しているかのようだ。幸い福井大学の藤枝先生がこの好酸球性副鼻腔炎の診断ガイドラインのリーダーをされており、全国からの症例の検討とともに、いずれ遠くない将来に治療法を確立してくれるであろう。なぜこの様な病気が増えてきたのだろうか。外来でも“鼻たれ小僧”はアレルギー性鼻炎が多くなった。栄養状態、衛生環境の改善なのか、いろいろと原因が推測されているがよく解

らない。医学は日進月歩で進歩し、我々人類も変化し、進化するのは当然であろうが、まだほんの四半世紀である。人類の長い歴史における時間の尺度からすれば、ほんの一瞬のはずである。この変化の速さに戸惑いと違和感を感じるのは私だけであろうか。

基礎研究にしても“なぜだろう”や“面白い”という知的好奇心よりも“何に役立つか”で研究予算が決まるらしい、それも期間限定で。このままではまたSTAP細胞騒動のような事がくり返される気がする。

北陸新幹線が敦賀まで通るらしい。便利になって、経済には良い事なのだろう。原発も稼働しないと、経済が活性化しないらしい。国の行ってきた事は、戦前戦後を通じて常に正しかったのだから…国が安全と保証した原発はもう二度と事故は起こさないであろう。福島の人たちのように、我々が生まれ育ってきた土地を追われるような事は決してないのであろう。あの事故はたまたま想定外であったのだから…国はいつの時代も、これから先も、常に我々の方を向いてくれているのだから。都会へ大学生として出て行った子供達にも安心して故郷に帰って来るよう勧めてもいいのだろう。

先日、本棚を整理していて、子供達の小さかった頃の小型ビデオテープが出てきた。再生する機械はもう生産していないので、捨てようか…とも思ったが、昔の思い出がいっぱい詰まったそのテープを捨てる事はできなかった。二度と観れないと分かってはいても…。撮影機や再生機を幾つも買い替えた、我が家は随分と日本経済には貢献したはずであるが…。

経済最優先で急いで、過去に立ち止まる事もなく、思い出に浸る暇もなく急いで……我々はいったい何処へ行こうとしているだろう。